

【資料紹介】 静観房好阿の『怪談楸筈』について
― 怪異小説から談義本への展開 ―

目次

はじめに

一 『怪談楸筈』の概要と書誌情報

(一) 概要

(二) 江戸東京博物館寄託本について

(三) 他館所蔵本について

二 所収怪談と『諸州奇事談』

(一) 所収怪談の構成

(二) 『諸州奇事談』について

三 静観房好阿の怪異小説と談義本

おわりに

キーワード 近世文学 版本 怪異小説 怪談 静観房好阿

『怪談楸筈』 『諸州奇事談』 談義本 改題本

はじめに

江戸東京博物館には、静観房好阿（一六九八―一七六九）¹ 作の『怪談楸筈』という版本がある。民俗学者・児童文学研究者の藤沢衛彦旧蔵

岩崎 茜*

「藤沢文庫」の蔵書であり、これらを引き取った武蔵野文化協会から当館の分館である江戸東京たてもの園の前身「武蔵野郷土館」収蔵を経て、現在は当館が寄託を受けている資料である²。題名の通り、怪談をまとめた怪異小説であり、四一編の怪談が収録されている。明和四年（一七六七）に出版され、以後再版本も確認されている³。『怪談楸筈』自体は、静観房好阿が著した『諸州奇事談』（寛延三年（一七五〇）刊）の本編をそのままに、挿絵を差し替え、新たな序文を付して出版した改題本である。『諸州奇事談』については他にも、『怪談楸筈』出版以前の宝暦一〇年（一七六〇）には『豊年珍話談』が、以後には安永七年（一七七八）に『天怪奇変』が出版されるなど、後摺本も出版されており、好阿の怪異小説の人気振りが窺える。

江戸時代における怪異小説は、出版文化の発展とともに広く人々から人気を博し、浅井了意による『伽婢子』（寛文六年（一六六六）刊）をさががけとして、続編や類書が数多く出版された。明代に著された『剪燈新話』などの中国伝奇小説を翻案した怪談を収録する怪異小説が、江戸時代前期の文学に与えた影響は決して小さくはなく⁴、以降、都賀庭鐘の『英草紙』や上田秋成の『雨月物語』といった怪談読本へと繋がっていく。

* 東京都江戸東京博物館学芸員

江戸時代前期の怪異小説に登場する怪異や舞台となる地域は作品により様々だが、その特徴として、仏教唱導的な要素や、勸善懲悪、因果応報といったような教訓的要素を含んでいるものが多く見受けられる。『怪談楸筧』もこういった内容が多分に含まれており、怪異小説はこうした教訓性に意義を見出していたとされる⁵⁾。

怪異小説が広まったほぼ同時代に教訓性を主題として庶民教化を掲げた出版物のひとつに、談義本がある。談義本とは、社会を滑稽に風刺しながら通俗的な教訓を示す小説で、十八世紀中頃に江戸を中心に広く流行した。なかでも宝暦二年(一七五二)刊『当世下手談義』(以下、『下手談義』)は、狭義の談義本の祖とされる。この『下手談義』の著者こそが、『怪談楸筧』などを著した静観房好阿であった。好阿は怪異小説で示した教訓性を踏襲して、談義こそを主題とした『下手談義』を著したと言える。

小稿では、『怪談楸筧』の概要とともに江戸東京博物館の寄託本を紹介し、好阿の怪談に見られる教訓性と、怪異小説から談義本への展開について、先学の研究を踏まえながら検討したい。

一 『怪談楸筧』の概要と書誌情報

(一) 概要

『国書総目録』で『怪談楸筧』の項を引くと、著者は静観房好阿、明和四年(一七六七)成立とあり、そのことは出版に際して好阿により新たに付された序文の「明和ひのとのいの春」、そして奥書の「明和四年ひのとのいの春」の記載から見て取れる。全五巻に四一編の怪談が収めら

れており、奥書に「東都書林竹川藤兵衛⁷⁾版」とあることから、江戸の版元で出版されたことがわかる。複数の現存本のうち、版元が異なる再版本も確認できるが、これについては後述とする。

題名の「楸筧^{しほり}」は、落葉をかき集める、または土を均すという「こまざらい」の意であろう。これについては好阿が記した序文から窺い知ることができ(傍線筆者)。

かけども落葉の盡せぬは誠なり松の葉のと、謡初の酒機嫌に廻らぬ舌で、咄下手の、かび⁸⁾の生た怪談も、聞上手の世上の君子と、八百萬の書林達諸共に、這は新や、珍らしやと、そしらぬ風流で一杯づ、聞召と申事の由を小男鹿の八つの御あたま振立て、笑給へ弘めてたまえ

恵方の道の端
道陸神の別当
静観房

明和ひのとのいの春

冒頭部分は能の「高砂」の一節であることから、「こまざらい」とは、「高砂」の尉が手にする福をかき集めるといふ縁起のいい熊手のことを指すとされる。さらに序文は、正月の酒に酔った回らない舌で話す「かびの生た怪談」と続く。『怪談楸筧』は、好阿が寛延三年(一七五〇)に著した『諸州奇事談』(江戸・須原屋平左衛門版)の改題本であることから、版木を同じくする本編は挿絵以外『諸州奇事談』から変わらず、序文が『怪談楸筧』のため好阿によって改めて付された。つまり、「かびの生た怪談」とは、『諸州奇事談』で既に語り古された怪談を指し、

そうした怪談であっても、書林たちと共に読者は笑って聞いてくれるだろうという、読み手への期待が好阿なりの軽快な言い回しで表現されている。

『怪談楸笈』に収録された四一編の怪談の詳細については次章に後述とするが、その大半に因果応報や悪行への戒めなどの教訓性、あるいは神仏の功德や回向の重要さを説く唱導性を見出すことができる。

また、四一編のうち、一〇編に『諸州奇事談』とは異なる挿絵が付されており、卷五「江州の勇者」の挿絵に「右十葉 北尾重政画」【図13】とあることから、浮世絵師で北尾派の祖である北尾重政（一七三九～一八二〇）によるものとされる。重政は錦絵や肉筆画に比べ、絵本や草双紙の挿絵を数多く手がけており、本書の挿絵のうち、特に怪異の絵については、後世の妖怪画に影響を与えたと思しきものも見受けられる¹⁰。

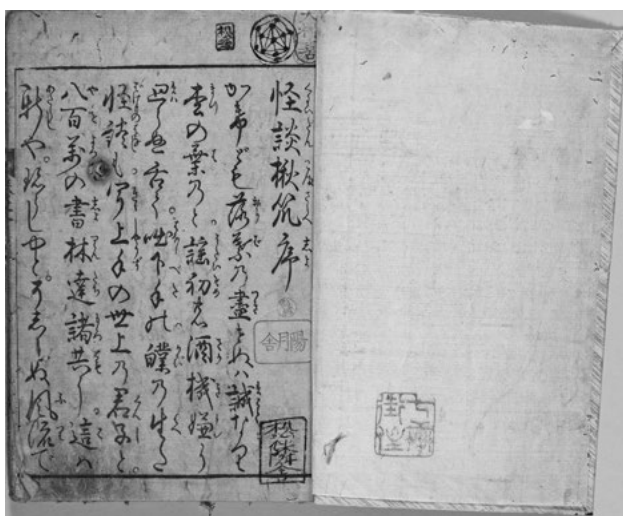
（二）江戸東京博物館寄託本について

『怪談楸笈』は複数の現存本が存在するが、ここでは江戸東京博物館寄託本（以下、江戸博本）と他館所蔵本の比較を通し、初版・後摺の様相を確認する。

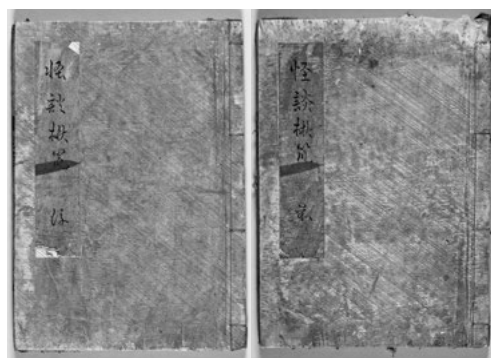
江戸博本についての特徴としては、まず、内容は五巻構成であるものの、卷三の途中で「前」「後」に二分された合二冊の体裁をとることが挙げられる【図1】。序文と各巻それぞれの巻頭部分に複数の蔵書印が押されており【図2】、様々な人の手を経て武蔵野文化協会へ渡ったと考えられる。

続いての特徴として、一〇編ある挿絵それぞれの一部分に手彩色が施

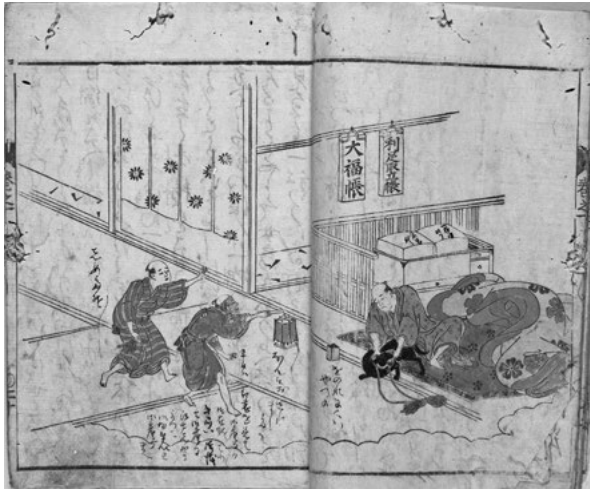
されており、さらに前巻挿絵の五編には、登場人物または怪異の台詞と思しき墨書が付されている【図3～12】。彩色については、職人等の手によるものではなく、所有者の誰かが描き込んだものと推測され、また台詞も本文中には存在しない言い回しであり、恐らく所有者が想像で書き加えたものであろう。後巻の一部挿絵にも彩色が見られるが、前巻よりも彩色箇所が少なく、台詞の書き込みは見られない。いずれにしても、彩色を施し、墨書を書き込んだ人物や時期について詳細は不明だが、落書きをするほどに版本がごく



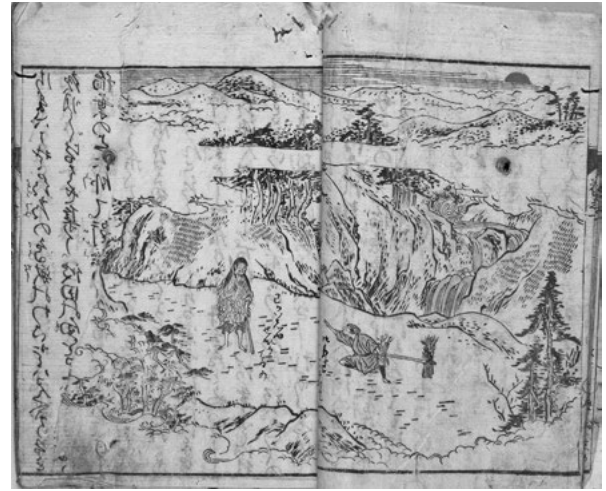
【図2】江戸博本序文冒頭蔵書印



【図1】江戸博本『怪談楸笈』表紙前(右)・後(左)



【図4】 前・巻一「猫児の忠死」



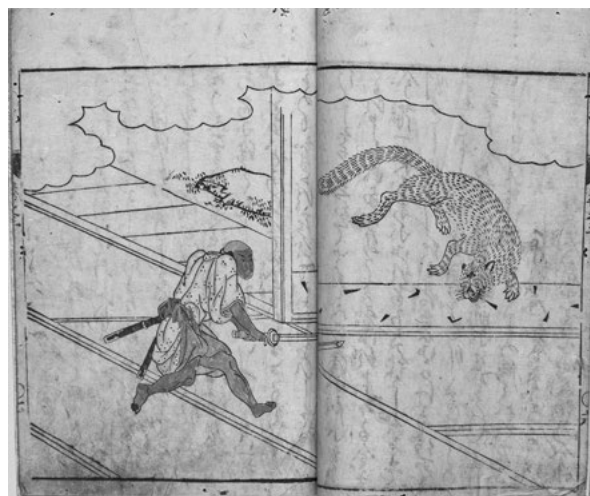
【図3】 前・巻一「相州の仙人」



【図6】 前・巻二「花中の鬼女」



【図5】 前・巻二「相州の山鬼」



【図7】 後・巻三「温泉の妖怪」
(ただし本挿絵は前・巻三に掲載)



【図9】後・巻四「鱸魚吞蛇」



【図8】後・巻三「余州の河童」



【図11】後・巻五「辻堂の化狐」



【図10】後・巻四「古鼠の妖怪」

右十葉
北尾重政画

【図13】「江州の勇者」部分



【図12】後・巻五「江州の勇者」

身近な存在であったことが窺える。

江戸博本は序文、奥書ともに明和四年以外の年代表記はなく、版元も竹川藤兵衛であることから、初版本であると考えられる。

(三) 他館所蔵本について

江戸博本との比較のため、ここでは早稲田大学図書館所蔵本（以下、早稲田本）¹¹、立教大学池袋図書館所蔵江戸川乱歩旧蔵本（以下、乱歩本）¹²、韓国国立中央図書館所蔵本（以下、韓国本）¹³を取り上げる。

まず、早稲田本については、江戸博本と同様に明和四年に版元竹川藤兵衛より刊行されたものとされ、序文や奥書に差異はなく、初版本であろう。五巻合一冊の体裁であり、表紙の題箋は「古麻左良反」と記されている。挿絵等につき込みはなく、後述の二本に見られるような目録も見られない。

続いて、乱歩本は巻一から巻四までの四冊が残されており、巻五を欠く。江戸博本、早稲田本に見られる好阿による序文はなく、巻一冒頭の「相州の仙人」から始まる。巻四巻末の「白犬知怪」の後に、「明和八年丑の年如月廿五日」と奥書が墨書で書き込まれている。その次頁には「蔵板小説目録 京寺町通四条南入町 山城屋佐兵衛」と題した目録が一丁分追加されていることから、京の版元から後年に出版された再版本とされる。

最後に、韓国本は五巻五冊の体裁で、それぞれの巻頭に「朝鮮総督府 図書館 国書登録番号 昭和18.4.15 古2469」の蔵書印が見られる。日本統治時代に所蔵されていたものである。乱歩本同様に序文はなく、奥書は「東都書林」の表記のみであり、初版本に見られる「竹川藤兵衛版」

の文字は版木から削られたと考えられる。巻五巻末に「崇文堂蔵版書目 江都日本橋通南三丁目 前川六左衛門¹⁴」とする目録が二丁に渡り追加されており、時期は定かでないが、江戸の別の版元から再版されたと思われる。

以上のことから、初版本とみられる江戸博本、早稲田本が出版されて以降も、別の版元から『怪談楸笈』の再版本が出版されており、江戸以外でも明和八年（一七七二）には京の版元で再版されていたことがわかる。改題本であるにも関わらず、出版以降に少なくとも二度の再版が確認できることから、『怪談楸笈』はかなりの読者を獲得していたことがわかる。

二 所収怪談と『諸州奇事談』

(一) 所収怪談の構成

『怪談楸笈』に収録された全四一編の怪談について、題名、地域、登場する怪異あるいは神仏の霊験、読み取れる教訓的要素、挿絵の有無を【表1】にまとめた。これを見ると、怪談の舞台となる地域は多岐に渡るが、その半数は関東が占めている。また、四一編の怪談のうち、二六編には教訓とすべき心構えや気質、戒めとすべき行い、あるいは神仏の功德や信心といった要素を看取できる。

例えば、巻一「江州の大蛇」では、村人を困らせるうわばみ（大蛇）退治を安請け合した浪人が、大蛇を目にするなり引き返し、「此うはばみ、すでに鱗三つあり、おそらくは龍に変かゝりたるなるべし。我力の及ぶべきものにあらず」と退治を諦めてしまう。すると浪人の弟が「武

【表1】『怪談楸策』所収怪談

巻	江戸博本	題	地域	怪異・霊験	教訓的要素	挿絵		
一		相州の仙人	上総国久留里	仙人	長生きのための養生	図3		
		猿の相撲	越後国	猿	—	—		
		江州の大蛇	近江国枝川	うわばみ(大蛇)	武士の理想像、臆病への戒め	—		
		笠嶋の神社	上総国から安房国	崇り、雨乞い	信心深さ	—		
		滝口の章魚	上総国から安房国	章魚、崇り	言い伝えへの背信の戒め	—		
		旅人の手柄	上総国から安房国	蛸	豪放	—		
		猫児の忠死	江戸	猫	忠心	図4		
二	前	相州の山鬼	相模国大山	さとり(山鬼)	—	図5		
		笹山の傀儡	丹波国笹山	傀儡	恩儀への背信の戒め	—		
		老女の悪報	陸奥国	奇病	因果応報	—		
		薺花の妖怪	—	首なきむくろ(悪霊)	因果応報	—		
		古狸の腹鼓	相模国鎌倉	狸	—	—		
		熊野の霊石	下総国印旛郡	霊石	信心深さ	—		
		幽魂の闘諍	江戸麻布谷町	幽魂	供養の大切さ	—		
		執着の小袖	武蔵国	小袖から伸びる手	執着心への戒め	—		
		少女の懺悔	上総国	呪詛	執着心への戒め、親孝行、怨憎会苦	—		
		花中の鬼女	備中国	鬼女	信心深さ	図6		
		市原の大蛇	上総国市原郡	大蛇	—	—		
		江州の貪夫	近江国	—	不慈への戒め、因果応報	—		
		三		古塚の妖怪	—	怪火	占いを過信することへの戒め	—
				温泉の妖怪	相模国	貂	—	図7
猫鬼の教場	—			猫	—	—		
麻布の古狐	江戸麻布			狐	—	—		
余州の河童	伊予国越智郡			水虎(がわたらう)	—	図8		
古猫党野狐	出羽国			女の首(狐)	一芸に慢心することへの戒め	—		
鱸魚吞蛇	上総国松野村			鱸	—	図9		
千葉の猛夫	下総国千葉			見越入道(狸)	豪胆	—		
四	後	封の生捕	—	封(がはたらう)	—	—		
		大鳥抓人	但馬国湯嶋	大鳥	—	—		
		古鼠の妖怪	—	古鼠	—	図10		
		鱸魚人を追	上総国市野川	鱸	—	—		
		猫が嶽の大蛇	信濃国	大蛇、大鷲	—	—		
		白犬知怪	越後国	化猫、白犬	恩儀	—		
		羽州の大猪	出羽国	大猪	—	—		
		辻堂の化狐	越後国国上山	石仏(狐狸)	信心深さ	図11		
		市ヶ坂の化生	安房国、上総国	妖怪、狼	信心深さ、恩義	—		
		堰道会天狗	武蔵国赤羽根	山伏(天狗)	高慢への戒め	—		
五		火車現葬所	石見国、安芸国	火車	慳貪への戒め	—		
		邪慳の姥震死	武蔵国足立郡	雷	邪慳への戒め	—		
		江州の勇者	近江国	崇り、小山ごとくなる法師	勇氣	図12		
		酒毒胸を破裂	上総国夷隅郡	—	痛飲への戒め	—		

士たるもの、一言は、金石より重し、命は義によりて塵芥より軽し、(中略) 一旦退治せんと請合、今さら鱗生じたりとて退く事やあるべき」と発破をかける。その言葉に同心した浪人は、弟と協力し、機転を利かせてついに大蛇退治を成し遂げる。勇氣ある弟がいなければ、浪人は臆病者として、このような武名を残すことも叶わなかっただろうと締めくくられるこの怪談は、武勇に優れた武士の理想像を示すと共に、臆病への戒めを教訓としていと取れる。また、大蛇退治の緊迫した戦闘描写もあり、後の読本を思わせる盛り上がり有した一編である。

神仏への信心深さゆえに怪異から助かった怪談としては、巻二「花中の鬼女」が例として挙げられる。桜の花盛りに吉備津宮の社人が、何者かに追われている様子のなまめかしい女に呼び止められ、助けを乞われる。悩んだ末に匿おうと社人が女を連れ宮居へ向かうと、女が社人の手を取った。その手は鉄石のように冷たく、怪しく思い女の顔を見れば、忽ち恐ろしい形相の鬼女に変化し、社人を引き裂こうと手をかける【図6】。社人が吉備津宮の神へ一心に祈っていると、遠くに花見客の声や唄が聞こえ、鬼女はかき消えていった。終わりに「吉備津宮の神徳に寄て、あやふきをまぬがれ給ひぬと、いよ／＼渴仰のかふべをかたむけるよし」とあり、社人の信心深さと、それに神力が応えたとする解釈が付されている。あるいは、女性の言を容易く信用したために恐ろしい目にあつたという、寓意的な戒めと取ることも出来よう。

右記のような明らかな教訓性や靈験等が確認できない残りの所収怪談については、その怪異のほとんどが狐狸や猿、猫、貂など、人を化かす、襲う、祟るとされる動物の怪異であり、これらの存在自体を警戒すべきという内容が見られる。例えば、巻三「猫鬼の教場」¹⁵は、とある武士の

家へ異様に猫が集まる様子を腰元が覗き見ると、手飼いの古猫を上座に据え、集まった猫たちが尊敬の体でひれ伏している。これは化猫だと驚いた腰元が主人にこのことを告げると、「そのま、差置べき事にあらず」と若党を連れ留守にすると見せかけ、猫の集会を覗き見る。そこには古猫を師匠として、四、五十匹の猫たちが飛び上がる稽古をしていた。家の者が武器や熊手を手に一斉に討ち入り、化猫たちを追い詰めていくなか、古猫は逃げ失せ、その後は怪しいことも起こらなかったという。当時の人々にとって、猫は鼠を捕る益獣、あるいは可愛らしい愛玩動物であると同時に、怪しげな挙動をするものは化猫として恐れられ、容赦なく退治する対象でもあった。また、仏教において猫は悪獣と捉えられおり、巻四「白犬知怪」も、怪しい挙動を見せ始めた飼い猫を追い出した結果、恐ろしい化猫となって襲い掛かってくるという怪談である。一方で、猫が貧しい飼い主のために盗みを働く巻一「猫児の忠死」のような、飼い主に忠義を見せる怪談もある。いずれにしろ、人間のように集って稽古をしたり、戸を開け閉めしたりと、獣とは思えないような挙動をする猫を江戸時代の人々は怪異として捉え、多くの怪談に登場させていた。このように、『怪談楸笈』所収の怪談は、教訓性を含む怪談、唱導性を含む怪談、そして教訓性の薄い、または見られない、動物の怪異を取り上げた三種の分類が可能である。

(二) 『諸州奇事談』について

続いて、怪異小説としての『怪談楸笈』の元となった『諸州奇事談』¹⁵の概要を見てみる。

『諸州奇事談』は寛延三年(一七五〇)に江戸の版元である須原屋平

左衛門より出版された。その内容は、当時写本として出回っていたとされる怪談集『向燈賭話』（中村満重著・元文四年）を粉本としていることが、好阿の門人である静観房静話による跋文に示されている¹⁶。

此書はもと向燈賭話と号して、東都の隠士中村氏の集めおかれて、正統二篇あり。卷は十餘り談は数百条、皆近世の事実なり。其中より撰ひとりて、繁きを芟、欠たるを補ひ、諸州奇事談と名付しは、書林の需によりて、吾師の房の、好阿弥陀仏が、老のくり事せしなり。今又其由を卷尾にするすは、門人静話筆を隅田川の流にそぐ

寛延三年の初春

右記の通り、『向燈賭話』から選んだ怪談を「吾師の房の好阿弥陀仏」、つまり好阿が間引いたり補ったりしてまとめ、『諸州奇事談』と名付けたことがわかる。また、巻五「酒毒胸を破裂」の文末でも好阿自身が「此事向燈賭話の続篇にしるし置し作者の心を汲て」と粉本に言及している。

この『諸州奇事談』と『向燈賭話』の二作所収の怪談の対比については、近藤瑞木氏の論考で詳しく検証が成されている¹⁷。これにより、巻一「猿の相撲」、「江州の大蛇」、「猫児の忠死」、巻四「千葉の猛夫」、「封の生捕」、「大鳥抓人」、「古鼠の妖怪」、「猫が嶽の大蛇」、巻五「羽州の大猪」、「火車現葬所」の一〇編の怪談の典拠が明らかとなっている。ただし、これらの検証は二〇編を収める抄出本と、六八編を収める異本により行われたものであるため、「数百条」を有するという完本でない点には注意が必要である。近藤氏は、この『諸州奇事談』と『向燈賭話』の所収怪談の対比を踏まえ、好阿が典拠とした怪談に何かしらの教訓性や

啓蒙性を見出し、自身の解釈のもとに「欠たるを補」って、怪談をより談義的内容に落とし込んだとし、それが好阿の怪異小説の執筆姿勢であったとしている。こうした姿勢は、好阿が『諸州奇事談』以前の延享五年（二七四八）に著した『華鳥百談』にも見ることができ、こちらは一六世紀末頃に成立したとされる説話集『義残後覚』を粉本にしている。なお、『華鳥百談』は後の明和九年（一七七二）に後篇として『怪談御伽童』が出版されている。

こうした既成の怪談から、好阿は談義に通じる教訓性を見出し、怪異小説を構成していった。それらの著作は出版以後に繰り返し再版され、さらに改題本も広く世に出ることとなる。『諸州奇事談』の後摺本である『豊年珍話談』は、宝暦一〇年（一七六〇）に江戸の版元・辻村五兵衛により出版され、『怪談楸笈』は既述の通り明和四年（一七六七）刊、さらに安永七年（一七七八）には『天怪奇変』という改題本も江戸・出雲寺和泉掾より出版されている。つまり、『諸州奇事談』は、確認されているだけで三度に渡って題を変え出版されているのである。好阿自身も、『諸州奇事談』に版元や読者の手応えを感じていたのではないだろうか。

三 静観房好阿の怪異小説と談義本

本章では、『怪談楸笈』の作者である静観房好阿の概略と、好阿が怪異小説作者から談義本作者になるまでの流れを概観する。

今でこそ談義本作者として知られる好阿だが、その出自は諸説ある。有力なものとしては、両国橋にほど近い淡雪豆腐屋を営み、後に店株を

人に譲り、手習師匠をしながら著作活動をした山本善五郎とする江戸人説と、浄土宗の僧であったが、還俗して大阪薩摩掘で医者となった積慶堂徳孤子とする上方人説などが挙げられており、これらは浅野三平氏により詳細がまとめられた¹⁸。浅野氏は両説を検討し、上方人説を有力としたが、一方で既出の近藤氏は江戸人説を有力としている¹⁹。両説の検討を見るに、少なくとも上方出身の好阿が、談義僧として諸国を行脚し、その後に還俗して江戸と上方を行き来しながら著作活動を続けていたことは、著作の版元を管見しても、江戸・上方の両方が確認できるため、ほぼ間違いのないであろう。

好阿の著作は、その筆名も複数確認されている。最初に著したとされる元文五年(一七四〇)刊『御伽空穂猿』では「摩志田好話」²⁰、延享五年の『華鳥百談』では「静観堂好話」²¹などが確認でき、『諸州奇事談』以降、『下手談義』にも用いた「静観房好阿」が主になっていった。『下手談義』の続編である宝暦三年(一七五三)の『教訓続下手談義』(以下、『続下手談義』)では、「西向庵好阿」と跋文で記している。「摩志田」は著作の猿を連想した筆名であろうが、話好きの「好話」から阿弥号の「好阿」への変化については、怪異小説作者から談義本作者としてのスタイルの変化によるものとの指摘がある²²。なお、『怪談楸筈』においては、序文で「恵方の道の端道陸神の別当静観房」といった名乗りをしており、肩の力を抜いたような気軽さが見て取れる。

好阿は複数の怪異小説を世に出したが、その足跡は『下手談義』の出版前と後とで分けられる。粉本を参考に自身なりの教訓性を解釈し、それをもとに怪談を著した『御伽空穂猿』『華鳥百談』『諸州奇事談』を経て、好阿は怪談を主題としない、談義こそをメインとした『下手談義』

を著した。翌年には続編の『続下手談義』も続けて出版しており、その手応えは確かなものであったと思われる。一方で、それ以降も怪異小説の出版はあったが、新たな著作ではなく、過去作の後摺や改題本が主となった。『怪談楸筈』を始めとするそれらにも再版本が確認できることから、引き続き多くの読者を獲得していたことがわかる。好阿の著した教訓性を内包する怪異小説は、後の談義本への展開に向けた助走的役割があったと言えるのではないだろうか。

おわりに

好阿が著した怪異小説『怪談楸筈』の概要を紹介しながら、江戸博本・他館所蔵本について比較し、また所収怪談の構成から見出せる教訓性や、元となった『諸州奇事談』と粉本『向燈賭話』について概観した。好阿が既存の怪談から教訓性を見出し、自身の解釈を加えて怪異小説を著したこと、そしてそれが後の談義本へ展開していくことを見てきた。

『下手談義』の出版以降、談義本は江戸で大流行し、多くの類書も刊行された。それらが後の滑稽本や読本、黄表紙へと展開していく様相を見ると、好阿の怪異小説が談義本への展開を見せたことは、江戸の文学や出版文化を考えるうえでも興味深い一例であると思われる。

談義僧をルーツとする好阿の来歴や著作の詳細については、未だ検証が必要なものや、資料不足により明らかでない事項も少なくないが、好阿が著作の主題としたことは、社会風俗を滑稽に表現しながら、良い行いを奨励し、悪い行いを戒めるといった、まさに談義僧が語る教訓的内容であった。実際に、好阿は『怪談楸筈』のなかでも、談義僧の体で語

られた怪談を取り上げている(巻五「邪慳の姥震死」など)。
談義本の祖として江戸の出版文化に多大な影響を与えた『下手談義』、
そしてそれらを醸成することとなった怪異小説群は、好阿の著作活動の
検討において、重要な位置を占めていると考えられる。

【註】

- 1 中野三敏「談義本の作者 静観房好阿」(『国文学解釈と鑑賞』第五九号)
一九九四年 六三～六四頁
- 2 武蔵野文化協会「藤沢衛彦文庫目録(和書編)」(『武蔵野第七号』)
一九九三年 五二頁。資料番号02151804・5
- 3 一章(三)で後述する乱歩本、韓国本がこれにあたる。
- 4 『伽婢子』を始めとする翻案怪異小説についての研究は枚挙に暇がないが、概
要は下記文献に詳しい。
・太刀川清『近世怪異小説研究』笠間書院 一九七九年
・江本裕校訂『伽婢子』平凡社 一九八七年
・堤邦彦『江戸の怪異譚 地下水脈の系譜』ぺりかん社 二〇〇四年
- 5 太刀川清『伽婢子』の創作意図(『長野県短期大学紀要三二二号』)一九七七年
- 6 中野三敏『新日本古典文学大系 八一 田舎莊子 当世下手談義 当世穴さかし』岩
波書店 一九九〇年三八一頁
- 7 時代は下るが、文政七年(一八二四)刊行の『江戸買物獨案内』(新日本古典
籍総合データベース請求記号「DIG-AJNM-139」(<http://kotensekinij.ac.jp/biblio/100219553/>)(最終閲覧日:二〇二二年一〇月二二日)に「泰山堂 元大
工町新道 唐本 和本 石刻 諸宗御経類 書物問屋 竹川藤兵衛」の記載がある。
本来は白偏に業の表記。
- 8 太刀川清「静観房好阿の怪異小説」(『国語国文研究 六八号』)北海道大学国文
学会 一九八二年 四七頁
- 10 巻二「相州の山鬼」の挿絵に描かれる膝を抱えた姿の山鬼は、漫画家・水木し
げる(一九二二～二〇一五)が描いた妖怪・山鬼のモデルとみられている。

- 11 早稲田大学図書館古典籍総合データベース請求番号「く13 03192」
(https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he13/he13_03192/index.html)
(最終閲覧日:二〇二二年一〇月二二日)
- 12 新日本古典籍総合データベース請求記号「DIG-RKRP-394」
(<https://kotensekinij.ac.jp/biblio/100297688/>) (最終閲覧日:二〇二二年一〇
月二二日)
- 13 新日本古典籍総合データベース請求記号「365-202-3」(<https://kotensekinij.ac.jp/biblio/100221090/>) (最終閲覧日:二〇二二年一〇月二二日)
- 14 註7同書に「日本橋新右衛門町 唐本 和本 仏書 石刻 書物問屋 前川六左衛門」
の記載がある。
- 15 国立国会図書館所蔵本(請求記号「235-163」)を参照した。
- 16 註9 五二頁
- 17 近藤瑞木「写本から刊本へ―初期読本怪談集成立の一側面―」(『都大論究』
三二二号)一九九五年 一五頁
- 18 浅野三平「静観房好阿」(『女子大國文』第六二号) 京都女子大学国文学会
一九七一年
- 19 近藤瑞木「玉華子と静観房―談義本作者たちの交流―」(『近世文芸』) 日本近
世文学会 一九九七年 四四～四七頁
- 20 早稲田大学図書館古典籍総合データベース請求番号「く13 01647」
(https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he13/he13_01647/index.html)
(最終閲覧日:二〇二二年一〇月二二日)
- 21 九州大学附属図書館請求記号「読本 II-3/延享5/ジ-1-2」
([https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac/details/?lang=0&amode=11&bid=](https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac/details/?lang=0&amode=11&bid=1000866178)
1000866178) (最終閲覧日:二〇二二年一〇月二二日)
- 22 註18 二七頁